参加者一覧 …… 02
連作欄 8首の連作 自由詠 …… 03
テーマ詠欄「4」 …… 14
一首評「そらよみ」 …… 18
クロスワード …… 19
短歌リレーコラム「望遠鏡」 …… 20
リレーエッセイ「いちごいちえ」 …… 22
次回予告・編集後記 …… 23

うたそら

Utasora

2025.
March
No.25

うたそら　第２５号
発行：2025.03.01
編集・制作：千原こはぎ
@kohagi_tw　http://kohagiuta.com/utasora/

うたそら

ご参加いただいたみなさん（五十音順）第25号

麻倉ゆえ @AsakuraYue
新井きわ @kiwa0419
有村桔梗 @chattenoire_k
井倉りつ @uta_litz
石川順一 @Hitler57
今紺しだ @imaconsida
宇祖田都子 @Shinnsyutu2020
hs @hswelt
歌島孟 @Sinn1990
がね @amicus08
涸れ井戸 @kareido1111
河岸景都 @kate_kawagishi
北谷雪 @kitaya_misomiso
君村類 @kmmr_r09
香子 @kyoko_shogi
久保田毒虫 @dokumu44
くろだたけし @tkuro2016
小泉夜雨 @kozumi_yau
桜さくら @wJS9f8NwfuJlVq3
鹿ヶ谷街庵 @ikasamabakuchi
西鎮 @xi_zhen_ivUT
寿司村マイク @xHksbNR4wv1wj8M
砂山ふうり
そう @iotu
たえなかすず @suzusuzu2009
多香子
千原こはぎ @kohagi_tw
とかげまろぅ @tokagemarou
中村成志 @nakam8
なべとびすこ @nabelab00
西淳子 @Jacky244Ray
西村曜 @nsmrakira
袴田朱夏 @hakamada_shuka
畑 依裕
薄荷。 @aieOhimeco
ひなお
平本文
廣珍堂 @Hirochin_dos
福山桃歌 @momoka_fukuyama
古井 朔 @saku_furui
真岡まな @mao_or_mana
まさけ @mskpompomfuwa23
御糸さち @MEATsachi
深影コトハ @cotoha_mikage
水上歌眠 @kamin_plz
南の島 @_nrkmnm
水セ @m_iya_o
虫武一俊 @mushitake
六厩めれう @mereumumai
村田一広 @mucci2022
森内詩紋 @NJq4oEvg5glcRpu
杜野詩季 @4kitanka55

計52名

たくさんのご参加
ありがとうございます！

ご感想はこちらまで！ Twitter(現X) ハッシュタグ #うたそら

「うたそら」では Twitter（現 X）でのご感想をお待ちしております。ハッシュタグ「#うたそら」をつけて、お読みになった感想をぜひお聞かせください。

次号予告 第26号

連作欄 8首の連作 自由詠
テーマ詠欄「休」
一首評「そらよみ」
短歌リレーコラム「望遠鏡」
リレーエッセイ「いちごいちえ」

短歌募集

第26号 〆切 '25 4/30(水) 24時
- 8首の連作 自由詠　- テーマ詠「休」1首

第27号 〆切 '25 6/30(月) 24時
- 8首の連作 自由詠　- テーマ詠「度」1首

投稿先等、詳しくはうたそらのご案内ページをご覧ください
http://kohagiuta.com/utasora/

編集後記

まさに三寒四温！という気候が続く今日このごろ、いかがお過ごしでしょうか。わたしは久々に風邪をひいてしまい、いま喉の痛み＋鼻水と戦っているところです。皆様もどうかお体に気をつけて、元気でお過ごしくださいね。

さて、短歌誌「うたそら」は前号で丸４年、今号から５年目に突入いたしました。ご参加いただいている皆様のおかげでここまで続けてくることができたのだと思います。今後も末永くお付き合いいただけると幸いです。

次号〆切は４月末、発行は５月頭になります。テーマ詠のお題は「休」。たくさんのすてきな作品を楽しみにしております！

編集鳥　千原こはぎ

今号のうたそら 第25号

参加歌人様……52名
連作欄……41名
テーマ詠欄……40名
一首評……2名

ご寄稿いただきありがとうございました！

コラム　小泉キオ さん
エッセイ　髙田皓輔 さん

illustration: kohagi chihara

リレーエッセイ 25

いちごいちえ

前号の人の短歌から一語を摘んで
それをテーマにエッセイを書くページ
今号のテーマと書き手さんは…

テーマ　マンション
書き手　髙田皓輔

国道のマクドナルドのプレイランドはドライブスルーから見えていた

髙田皓輔

マンションに住んだことがない。そしてこれからマンションに住むことはないだろう。自信がある。マンションや高いところにいると、今わたしはとても位置エネルギーが高い、と思ってしまう。その位置エネルギーはふとしたときに運動エネルギーに変わって、ものすごい速さで落ちてしまうのではないか、という恐怖に襲われてしまう。どうしてみんな普通の顔をしていられるのだろうか、落ちたらひとたまりもないのに!、落ちないよって、笑って言うけど本当に?

それとして、マンションに憧れがある。小学校の頃、マンションに住んでいた友達はみな明るかった。それはマンション特有のコミュニティが、帰属意識みたいなものがある気がしてこれは親同士のコミュニティによるものだと思う。それゆえの社交性がマンションに住む友達にはあって、そこに混ぜてもらうわたしはその社交に乗っかって見よう見まねで、マンションの探検をしていた。マンションの友達は人を家に招き入れるのに慣れていたり、お菓子やジュースが用意されていたりして、「家」が社交の側面を持っていた。わたしの「家」はほとんど人を家に招くことがなく、そういうホスピタリティというものを両親から感じることもなかった。新鮮に、他人の家庭や、その周辺のコミュニティと、自分との違いを感じ取っていた気がする。

自分の家や町、所属に帰属意識をしっかり持つことは大事なのだと思う。都会でも田舎でもないような地域でほとんど育った。ちゃんとした都会に出ようと思えば一時間くらいはかかる。少しチャリを漕いで隣町に行けば畑が広がっていたり、小学校が統廃合していたりする町があるが、自分の住んでいる町は、ベットタウンとして宅地が増え続けていた。生活には車が必要で、土地はあるから、ホームセンターやショッピングモールは十分にあって困らない。それゆえ、都市的な、田舎的なアイデンティティーのどちらもなく、言うとすれば郊外であり、帰属意識が大してない。

どういうところに住んでいるか、所属しているかを簡潔に自虐的にならずに相手に伝えられるかがしっかりと帰属意識を持って町を、所属を容認して生きていくことだと思う。今のところわたしは、町や所属を説明するのに、自虐的に文字数を割いて紹介してしまう。

そういう町だからこそ、マンションはひとつのランドマークであり、マンションに住む友達はどこに住んでいるのか聞かれたとき、「あそこに住んでいる」といえば済む。その軽やかさに憧れていた。

これからわたしは、町を選んだり、所属する場所を選んだりしていくのだろう。軽やかに説明することができるだろうか。そのためにマンションに住むのだろうか、住むとしたら低層階だろう。そうして、なぜ低層階に住んでいるかに文字数を割くのだろう。

連作欄 8首の連作 自由詠

#うたそう

うたかたMuseum

新井きわ

マティスの描く《金魚》はきつと寂しくてあなたの酸素すつと吸ひ取る
原色の世界に生きしゴーギャンはポリネシアの園、蜜に溺れる
頸切りの刑にあひたる向日葵の二本の黄色　ぎしぎしとゴッホ
マネの黒見つめる君の瞳孔にわたしはゐないセントラルは黒
《踊り子》の絵葉書そつと持ち帰り足の甲に貼るボルタレン
耳飾り失くした少女が夜夜毎(よるよごと)わたしのシーツに青塗りたくる
《刺繍するモネ夫人》縫ひ針は落ちわたしのこころの痛点を刺す
道長とまひろの《接吻》クリムトの黄金(こがね)のひかり纏ひたり　今

Masala

井倉りつ

自分から手放したのに２０２号室のカギ　行くとこがない
あまやどりまぶたにあまつぶ春先の雨しょっぱいな　点字ブロック
おかしいな君とあまやどりしたときは雨って甘いと思ったのにな
「孤独なのは誰といたって一緒」ならためしにひとりになりたかったの
甘い雨がずっと続くと思ってた　どんどんどしゃぶりひどくなってく
誰かさんのいない日々　物足りなくてスパイスを集めたりしている
そういえばさよなら言ってなかったな　粉々にすり潰すクローブ
寒い日に甘さの足りないマサラチャイ　ぴりぴりするけどどうしよっかな

覚知

石川順一

枝からのカワセミダイブ見て居ればコセンダングサの花びらが付く
枯れ枯れてコセンダングサ疎らなりカワセミダイブ見るは楽しも
北西の水路にカワセミダイブする人を認めて南東へ逃げる
山道は笹鳴き聞こえ山頂へ参謀総長の揮毫が聳え
台座付き全身像は無くなりて誤解が草の様に生えたり
ポンカンやミカンの輪切りに来るメジロヒヨドリなどのささめきを聞く
休眠の日日草が発芽する初冬から真冬咲かずに枯れて
珈琲と大きなシュークリーム食べタ餉は魚か肉かは知らず

ウラシマ

今紺しだ

田園の真ん中を行く宇宙船　すこし未来の時空に下りる
相対論なんていらない　きみと同じ速度で老いていけないならば
隣り合って膝を抱えたそのままで四季のすべてを見た昼下がり
そっと弦にふれる　ギターはいつまでもきみと一緒にいるんだろうな
好きな曲みたいに今日の頬ずりのやわさをループ再生したい
抱き合っていたら外では五十年経っていましたそれでもいいよ
夕焼けに二人で染まる　シュレッダーに言葉は吸い込まれたみたいだ
かげらずに笑おうよ少女漫画の最終巻の表紙みたいに

屋上獏部25

宇祖田都子

茄子尖れ空は砕けろオートバイにはピアニカの呼気が有効
茄子棚に次々獏の成り下がる園芸部の支配下の夕べ
謎のない茄子の迷路の窓べりで焼き茄子を獏そっくりに剥く
粛々と校舎は沈み茄子は浮く獏から棘が奪われていく
屋上の防水層は透き通り獏に噛まれて空虚な化石
くるぶしの向こうに掘り出したピアノ「屋上ニ茄子ヲ持チ込ムベカラズ」
ゆっくりとまっすぐ茄子は落ちてゆくはちきれそうな悪夢　かわいい
楽器なら吹くか叩くかする形ラジエーターは茄子の後釜

ヘッダ・ガーブレルになるワタシ

歌島孟

新居には将軍、父の肖像と形見に重い二丁拳銃
あの人のファムファタールになってやる。あんたがミューズだって言うなら
誰もみなおのずと罪を語りだす召命を受くマタイのように
天啓のような光に背をむける私は嘘を騙るのだから
あなたへと放たなかった銃弾が心に深く残ったらいい
勝ち馬に乗った私はゆくりなくピアノを弾くの喪服のままで
破滅する運命だって手のうちにおさめたいから引き金をひく
美しい花の匂いに囲まれていたい。棺のなかでさえ、なお

いえません。意図的に言い切らずに謎として残している部分があり、そこがまた魅力だからです。上句と下句それぞれはわかる。上句と下句のつながりをうまく説明できないのだけど、その二つがぶつかったときに確かに何か呼び起こされる感覚がある。

この辺りは「悪友」の栞の中で、染野太朗さんが「映画のように」という文章を寄せていらっしゃるのでぜひお読みください。

こういった作りの短歌は俳句も短歌もやっている方が上手いような気がしているのですが実際どうなんでしょうか。二物衝撃というやつなんでしょうか。

二物衝突的な歌については、平岡直子さんが「起きられない朝のための短歌入門」の中で「狙っておきにいけるようなものではない」「手探りの作業になる」とおっしゃっていて、飛躍の名手みたいな平岡さんでもそうなんだ……!!!と安心したような、大の字になって倒れ込みたいような気持ちになりました。

王国は滅びたあとがきれいだねきみの衣服を脱がせてこする　／平岡直子

ちなみに同著の中では手探りのコツを二つ教えてくださっていて、そのうちの一つは好きな既存の衝突の仕組みを真似すること、とのことでした。

個人的には、海月莉緒さんの歌がいつも素敵だなと思っていて真似したいのですが、難しい……。

夏風に森は薫って両想いだったらきみと見たい絵がある　／海月莉緒

焼き鳥を串に刺さったまま食べるまた私から謝るのかな　／同

上句と下句の比重が釣り合っていて、どちらかがどちらかの説明になってしまっていないこと。つまり、読み手に伝えることに重きを置きすぎていないこと。何となく一首全体に（実景かどうかは別として）本当に感じたことを純度高く織り込んで作られているんだろうなぁ……という説得力があります。自身の感性に誠実である結果、読み手に伝えようとしすぎないことになり、かえって歌の世界が広がって感覚的に伝わってくるというか。

感性についても考えたいと思います。冒頭では、自然を自分なりに取り込んで出力したものとしての芸術という説に触れました。この取り込んで、が重要なんだろうなぁ。何を取り込むかどう取り込むかがあって初めていい出力が生まれる気がします。

感性の繊細さで憧れているのは岡本真帆さんです。

晴れの日は風と暮らして雨の日は涼しいなって気持ちと暮らす　／岡本真帆

夏が好き　すべてのものが永遠のような顔してそうじゃないから　／同

いわゆる発見の歌とも違うんですよね。もっと繊細な肌感覚で捉えている印象があります。

先日、作者の意図とはそれぞれ違う読みで複数の方から歌を褒めていただくことがありました。くすぐったい気持ちもありつつ、本来の自分のリーチより外で誰かと手を繋げたような気がして嬉しかったです。読みが分かれた箇所は、文字数の関係もあり意図的に説明しなかった部分でした。それが良かったのかなぁ。曖昧な部分をそれぞれの読み手の方が自身に引き寄せて読んでいただけた幸運というか。このコラムの前半の部分で「短詩は余白を創造させるようにシンプルな線画を描くようなもの」と勝手な認識を記しましたが、その話を続けるならば線を書きすぎると余白が消えてしまうんだなぁと感じました。あんまり伝えすぎようと思わないほうがいいという話、歌歴三年にしてやっと腑に落ちてきたかもです。

31音のホースのちょろちょろから虹を出したいんだみたいな滅茶苦茶な話もしましたが、虹がかかる時だって半分運みたいなものだし、結局たくさん歌を作って手探りしてみるしかないんだと思います。誰かから見たら、角度によって虹がかかっているかもしれないし。虹を出せる詠み手に、虹だ！と見つけられる読み手になりたいものです。

ちょうどいい木の棒

がね

一歩目がざりっと鳴った　今日はもう、家に帰ってしまってもいい
地下鉄とホームの間のくらがりにスマホを落とす　きがする　きっと
ちょうどいい木の棒があるのにそれを持たずに社員証をかざした
おはようにおはようと返す人がいる　それだけだった今日の会話は
今日分の仕事が出来てしまったら今日はいなくていいということ
お徳用なんて名前は嫌だよなそれでも得がしたいから買う
ちょっとだけ好きなYouTubeを観ていたら溜めてたお湯がちょっと冷めてた
苦しくもない毎日の苦しさを振り切るために寄る高島屋

リスタート

涸れ井戸

羽束師の免許試験所三十年ぶりに訪う懐かしの道
高密度事故のビデオにおののいてゴールド免許五年ぶり手に
昔から変わらぬダルマ横手には大書で太く交通安全
バスならば五十分待ち歩いても帰れるだろうとぼとぼ歩く
途中からバスに拾われ駅まではリスタートについて考える
青から金、青、金ときて昔日の自転車で何処までも行けた子は
モーニング間に合ったのでソーセージエッグ定食選ぶ雪晴れ
五年後の世界を思う軍拡の党首和平をのたまうテレビ

生命線

河岸景都

この道を真っ直ぐに行く　無理矢理に三半規管を正常にする
すぐ欠けるピンクベージュの指先にいつか重さを与えてみたい
掌の生命線が頼りなく震えるときは少し眠って
あの人の光が痛い　網膜を焼かれたように見えなくなった
耳鳴りの一番高い音ばかり拾った歌はとても寂しい
考えて考えすぎて怖くなる脳神経の接続不良
血液は涙のもとになるらしい　知らない振りの演技は得意
明るさは私の味方吸う息で肺の奥まで光で満たす

エンドロール、眠たい

北谷雪

薄氷のような手鏡を選ぶ　メイクは知らない　恋ならすこし
将来とは四月のことで浪人はとてもおそろしい孤独死くらい
猫の背が椿を揺らしゆくようにすれ違うたび想う手の甲
子犬には懐かれるほう足元へだれかのＭＯＮＯが弾みつつ来る
しろ色の甘味は淋しくヨーグルトスカッチだけが例外だった
花柄のミモレを試すときすこし季語になりたがるふくらはぎ
担任とおなじ苗字のスタッフを数える　エンドロール、眠たい
こんな日々で良ければ二十年先で青春だったと笑ってほしい

短歌リレーコラム 望遠鏡 25

短歌にまつわるあれこれについて
自由きままに書くページ
今号のテーマと書き手さんは…

書き手　小泉キオ

テーマ　ひろがりのある短歌

先日、natureの対義語がartだと知って随分うつくしいなと思いました。かみさまが作ったのがnature、人が作ったのがartというのが主力の説明らしいです。なるほどなぁ、そう説明されると納得するような。ちなみに、一番情報量が多いのが自然でそれを五感に取り込んで解釈して出力するのが芸術、という説もあるとのこと。どちらかというとそっちの説が気に入っています。

短歌はまさに「自分なりの出力」なわけですが、平均出力31音しかない細いホースなので普通にやると水はちょろちょろとしか出ません。出ませんが、ときどき同じ31音のホースからこんなにも水が?!海が?!虹が?!とそのひろがりに驚く歌に出くわすこともあります。短詩の醍醐味といえばその通りですが、やってみるとやっぱり難しい。あれどうやるんだろうな……虹出したいよな……出したくないですか……？筆者は歌が散文的というか説明的になりやすく、伝わりやすい代わりにひろがりがない自覚があります。遅筋と速筋でいうと速筋タイプ。遅筋も使えるようになりたい。今回せっかくコラムという場をいただいたので、ひろがりのある短歌を研究してみたいと思います。

さてさてここでいうひろがりとは、ひとつの短歌を入り口にしてその奥に広い世界がひろがっているように感じられること。いい映画をみている時に、何だか自身の思い出とか忘れていた感情が呼び起こされることがないですか。あれに近いです。あれを狙ってやれるようになりたいのです。共感性とか普遍性を意図的に自身と観客の間に置くという技術なんだと思います。ただ映画は総合芸術とも言われる情報量過多の媒体なので、全体をイメージしながら点描画の点を置いていくようなもの。逆に短詩はミニマルな芸術なので余白部分を想像させるようにシンプルな線を置いていくようなものかもしれませんが。

あなたとはずっと異教徒なのだろう春を希望のように祀って

／早月くら

まぶしさに呼ばれたような、文庫本閉じれば川を横切るところ

／同

終末は海へ行こう、を誤字とせずこの約束を千年生かす

／同

三首とも早月くらさんの歌です。早月さんの歌はレースのカーテン越しに触れるような印象の繊細さがあってとても好きです。よく詩的飛躍というワードをききますが、早月さんの場合は単語の選び方とつなぎ方で詩性をきっちり持っていて、例えば一首目の「春」「希望」「祀って」と飛躍が単語単位でスパンが短いと感じています。これを真似しようとするともっとゴチャついたり忙しなくなるところ、語彙のうつくしさと統一感でちゃんとまとまっている。あとは題材としては意外と身近な体感が歌の核になっているところが特徴だなと感じます。読者側も体感したことがある感情なんだけども、自分では紡げない言葉で歌にしてくれているというか。「千年」という言葉もつい大仰になりがちですが、希望とか祈りのような感情を載せることで手の届く範囲の言葉になっており、違和感がありません。歌の核の部分で共感させてくれつつ、表現で世界をひらいてくれるパターンとでも言いましょうか。

機嫌なら自分でとれる　地下鉄のさらに地下へと乗り換えをする

／榊原紘

榊原紘さんの「悪友」は多分一番読み返している歌集なのですが、全部理解できているとは

遠いよ

君村類

水晶体　空を知らない地下鉄にただ運ばれて朝がはじまる
みんなみんなうつむいている車両で本当に本当にうつむいている
なにもないからだでうまれてきたはずで親を見るとそれがまぶしい
吐く息がまだ濁っている三月の日差しの中で愚痴がほどける
知っている言葉は氷　きれいなものをしゃべると拒まれてしまう
日が沈む前に抜け出す実家の建物の　影、こんなに長かったっけ
でもきっと脳は忘れてくれるからふるさととしてまじまじと見る
遠いよ、と教えてくれた町に帰る　遠かったのは距離じゃなかった

夢見る頃を過ぎても

香子

少しだけ右上がりがちの細き字に柔(やわ)く優しき指思い出す
知らないの　君の真意も温もりも知らないままが美しくもある
ぐるぐると迷路彷徨(さまよ)い閉じ込めて　あの夜(よ)の5秒、永遠となれ
コイントスやってみようか軽い賭け白黒つけたい悪い癖だわ
今どきの若い子の方が器用かも送信できぬ想い積ませる
日常という紙やすりで磨かれて思い出ばかりが輝いていく
きらきらと光るグラスの縁(ふち)なぞり　もう間に合わぬと割りたき衝動
引き剥がすように日々へと戻りゆく夢見る頃はとうに過ぎてる

ポジティブ

久保田毒虫

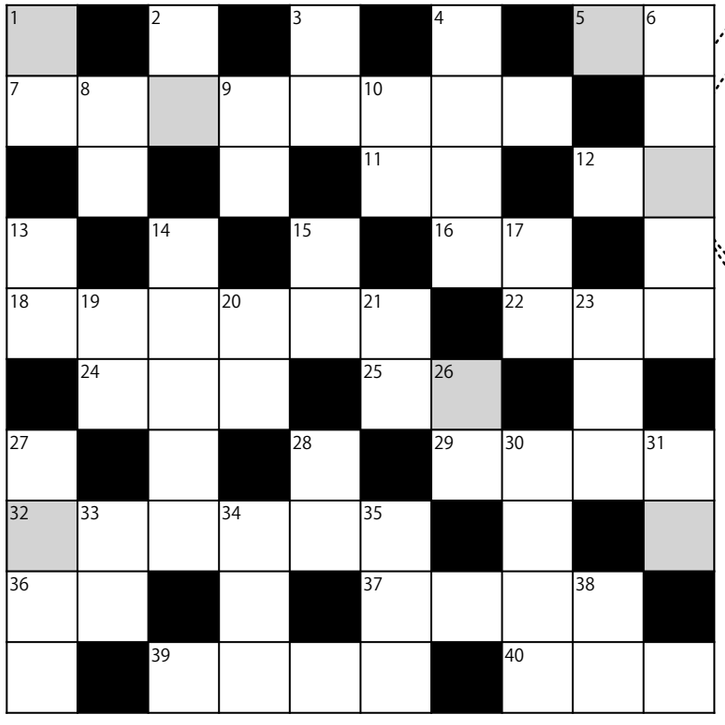
ネガティブだネガティブ過ぎる世の中でみんながみんな疲弊している
ネガティブだネガティブ過ぎる世の中で飛び交う言葉は刃物しかない
ネガティブだネガティブ過ぎる世の中でこんな世界に誰がしたのだ
ネガティブだネガティブ過ぎる世の中でいない貴方を思い出す日々
ネガティブだネガティブ過ぎる世の中でもしも貴方がいてくれたなら
ネガティブだネガティブ過ぎる世の中でいや貴方にはいてほしくない
ネガティブだネガティブ過ぎる世の中で貴方に悩んでほしくないもの
ネガティブだネガティブ過ぎる世の中で貴方に泣いてほしくないもの

森ごと燃やす

くろだたけし

給湯器を切ったあとでもしばらくは温かいことあてにしている
繁る葉の影をひとつの影にして孤独を受け入れる常緑樹
白と黒両方ないとわからないわたしのことがいつも心配
積みあげて積みあげすぎて揺れていてもやり直そうと言えない感じ
（ぼくの手と口のサイズに合っている獲物であれば）誰でもよかった
傷ついた人をかくまう森がある（森ごと燃やすことにしますか）
まだ固く閉じたつぼみの隙間から見えてしまって春のネタばれ
居間にあるでかいテレビの裏側がこの世で一番裏側だった

ほっとひといき 気軽にクロスワード



タテのかぎ

1　あることの影響が他に及んだその名残
2　○○びきの山鳥の尾のしだり尾の長々し夜をひとりかも寝む　／柿本人麿
3　その時々につけられた物の値段
4　早朝にひらく野菜・魚などの市
6　保温または保冷用のポット
8　三角○○、宝○○、アミダ○○
9　母の住む国から降ってくる○○のような淋しさ　東京にいる　／俵万智
10　動物の指の先にある、かたいもの
13　お父さん
14　アメリカの首都「○○○○○D.C.」
15　かぎ
17　マップ
19　柴田葵 歌集『母の愛、僕の○○』
20　ここに物を置くと汚部屋につながると言われています
21　高知
23　今年もそろそろ飛び始めました
26　会議で相談すること、その内容
27　品物を売り買いすること。商売。
28　手のひらが大きいねって言ったこと去年の○○のことにしないで　／嶋田さくらこ
30　羽根突きに使う
31　物事を始めるときに必要となる土台
33　金木犀わからないまま生きていく○○のかたちに出るマヨネーズ　／岡本真帆
34　ウクライナの首都
35　鳥のやわらかな羽や毛
38　液体に含まれる沈殿物・不純物などをこすのに使う紙

ヨコのかぎ

5　一回のオモテの○○の攻撃がもう三時間続いています　／田中ましろ
7　大勢の人が、手をたたいて大声でほめる行為
11　兄弟姉妹の娘
12　鼻の長い大きな動物
16　傘を盗まれても性善説信ず○○親のような雨に打たれて　／石井僚一
18　落下傘
22　写真や絵を使いいろいろなものを解説した本
24　人類が築き上げてきた有形・無形の成果
25　水辺に生息する、くちばし、くび、脚が長い鳥
29　自動販売機を略して…
32　各種手当を除いたベースとなる給料
36　みずみずしい秋のくだもの
37　うすい紅色。ピンク。
39　惜しげもなくお金を使って派手に遊ぶこと
40　自分じゃないもの

こたえ

色付きマスの文字を並べ替えてことばを作ってね

駆ける、生きる

小泉夜雨

雪玉をふたつ繋げてできたのがわたしにとって生き物だった
することもなくなって俯く昼の、マッハじてんしゃ／ダートじてんしゃ
駆け巡るために広野は残されてでんきねずみの進化まばゆい
感情はあってもなくても困るけどただひたすらに駆け寄ってくる
マリが手を舐めたから好きになったしヨークシャーテリアを覚えたよ
花で囲んだマリはきれいで死がいちばん怖いことだと思えないまま
風のある日ほど思い返せるすべて汝のあるべきすがたに戻れ
生きていてもいなくてもいい温かいような気がするのが春だから

節分

桜さくら

カロリーはあとできっちり燃やすからチーズまみれの丸餅を焼く
鬼の数以上で豆の数未満　共に数える春の口福
夜な夜なに鬼を祓える面もちの我がトラ猫はひがな寝ており
裸木へ乱反射する蝋梅に溶かるる冬の共犯者達
春色の醸造ビールを注ぎあって部活のように野望を語る
早すぎる旅に献ずる花灯り墨桜なら天に流れむ
別れよりけじめと思うあの頃のままの微笑と見つめ合いつつ
ちりぢりの冬眠願望　街角の桜かざせるスタバに寄れば

惑星の中で僕らは

鹿ヶ谷街庵

人類が初めて月に降りたった気持ちで触れる赤ちゃんの頬
ＳＯＳ　狼煙をあげてＵＦＯがさらいにくるのを待ってた、ぼくは
マイケルに寵愛されたバブルスは人類よりもしあわせだった、か？
ニッポニア・ニッポンみたいなわたしです　つめたくされるとすぐ滅びます
予告なくひとは死ぬから惑星の数より多く愛のことばを
気の抜けたビールのような力ないゆびきりだってまだ覚えてる
東京の夜ふけは白夜　終わらない仕事の合間にラッシーを飲む
マフラーを顔まで巻いて吐く息の果てには星があるんだろうな

爪を噛む

西鎮

肉厚のキャベツを選ぶなにひとつ応えてあげられなかった帰路に
県道を横切る猫がその途中たぶん僕だけを睨んでたと思う
また母の着こなす兄のイモジャーのラインがまっすぐ過ぎて冬晴れ
結果的に痒かったのに掻けなくて目を剥きながらの歯磨きになる
限りあるものばっかってことぐらい気づいてたはず　枯れた石榴樹
親指の爪をときどき噛む癖の生まれた校舎が廃されてゆく
それなりにしてこい、というおじさんに店長はなにも言い返さなかった
Ｅテレがもう放送を終えるころ冴えわたるように醒めてきてます

一首評 そらよみ

前号の「うたそら」から気になった一首をとりあげて200文字くらいで語る一首評のコーナーです

わたしには裏と表があるけれどどっちのわたしも深爪みたい

水上歌眠

〈天使〉をレンズとして現実とイメージが交叉するような一連「天使わいわい」の三首目。一連の、特に現実的な領域を象徴する一首に思われた。〈表と裏〉は実生活における作中主体の自覚、〈深爪〉は軽微な痛みの象徴と受け止めた。「自覚される自己の二面性の双方に痛みが付帯する」という矛盾めいた実感でもって、主体を含む誰もが現実世界で感じうる生きづらさが、瑞々しく詠われていると思う。

一首評　西鎮

ぬいぐるみのひとつひとつにおはようのキスをしている歯科衛生士

西淳子

虫歯は口づけで感染する。そういう説がある。歯科衛生士を職業とする人が虫歯であるとは（一般的には）考えにくい。ましてぬいぐるみが虫歯に罹るなんて非現実的だ。
しかし、その二つの「まさか」が重なるとどうだろう。ずらりと並ぶ（「ひとつひとつ」と言うからにはかなりの数）ぬいぐるみに、自分の「虫歯」を移してゆく。ささやかで爽やかな感すらある、早朝のホラー。結句まで漢字が出てこない表記も効いている。

一首評　中村成志

「そらよみ」一首評募集

前号の「うたそら」からあなたのお気に入りの一首を引用し、その歌について200文字以内でお書きください。お一人につき一首まで。
ご自分の短歌ではなく、他の方の作品でお願いいたします。
公序良俗に反するもの、作者や他人の人格を傷つけるような投稿は掲載できませんのでご注意ください。

ご投稿はこちらの投稿フォームから！

ほっとひといき 気軽に クロスワード 前号の答え

こたえ：ウ タ カ イ ハ ジ メ

1 ダ	レ	■	2 ル	3 イ	■	4 シ	5 オ	■	6 キ
ガ	■	7 シ	■	8 ケ	9 サ	■	10 ウ	11 テ	ン
12 シ	13 シ	マ	14 イ	■	15 ト	16 ウ	セ	イ	■
■	ヨ	■	17 レ	ジ	■	18 マ	ツ	カ	19 サ
20 ト	ウ	21 ラ	イ	■	22 ハ	■	マ	■	ー
■	23 ブ	ジ	■	24 ウ	リ	25 バ	■	26 カ	キ
27 ア	■	28 オ	29 ヤ	ジ	■	30 イ	31 ジ	ユ	ツ
32 セ	33 ミ	■	マ	■	34 リ	キ	シ	■	ト
■	35 マ	36 メ	■	37 シ	■	38 ヤ	ヨ	39 イ	■
40 ゲ	ン	ド	ウ	リ	ヨ	ク	■	41 タ	ツ

前号のクロスワードはいかがでしたか？
今号もどうかお楽しみいただけますように☆

春はいかなご

寿司村マイク

しずやかにホーローの立つまだ寒い台所には銀のいかなご
ボールざるは陽をつかまえて四キロを洗うあの日の叔母の指先
ザラメ糖まぜる新品菜箸の先から春はやわらかに来る
真っ白なレースカバーのかけられた母のピアノを見たことがない
たたたたと鳴らす郵便配達の街かど停める二輪の傾き
くり返す一年でしょう毎年のエプロンならば花柄でした
いかなごのくぎ煮シールのハクリ紙が手を抜け床まで二秒三秒
海のなかの噂話はすべて嘘　レターパックでくぎ煮を送る

S（UNAYAMA）F岡（世界は青い現象である）

砂山ふうり

橘に繁る葉っぱの濃くなれば響く香りで蟻が働く
上流でとても知的な生活をするひとが汲む水が飲みたい
モヤモヤの中には滝があるというきみの胸にもぼくの胸にも
真面目さが取りえの虫や花だから色あざやかに生きる溪谷
あのひとの考え方に付き合ってきたひと達の雨の居酒屋
一癖も二癖もある家だから階段上るときは静かに
親亀の上に子亀が子の亀の上に孫亀その背に苺
とにもかくにも生きてみて理解した世界は青い現象である

テレパシーナ

たえなかすず

どこまでが愛でどこから詩なんだよ繰り出してくるきみの言葉は
恋人になれるどころか親友も無理で一番安いのり弁
ビタミンC亜鉛もろもろ補給して追い上げてゆけ青春の途（みち）
希望とは　きみの「いいね」を知ることができなくなって少しうれしい
寝入りばな現れないでガラケーの粗い画質の前の前の恋
地下鉄のホームとおなじ昏さにてきみのほとりに立っていたっけ
春先の野をゆくときに唯一の手荷物として認めるボール
にこにことホラー映画のあときみはステーキを刺す追いつめながら

猫の日にゃん

多香子

わたしだって獣ですのと家のミケこたつの中で爪を研いでる
早春賦冷たい風の街をぬけ家に待ってるあたたかい猫
色白のうさぎのような仔が生まれ冬の終わりに皆でバンザイ
バースデイオムライスには何添えよう、もちろん私の愛と一緒に
相槌をうつように頬に打ちつけるしっぽに今日を慰められてる
恋しても裏切られてもおしまいに指切りひとつ大人の童話
夢見頃そんな私を笑わずに一緒に夢見る三毛猫といる
猫バスの運転手さんはやはり猫　花咲く道を踊るように行く

「ほかに仕事は無いですか」午後四時にラストオーダーみたいに君は　◆まさけ

「皇」と「陛」習う小学六年生　「周」と「富」「徳」知る四年生　◆御糸さち

通勤の優先席でＯＬが見慣れた第四形態になる　◆深影コトハ

四季咲きの花がそんなにこわいなら天国はおすすめできません　◆水上歌眠

そっと噛んでみるみそ汁のさつまいも四万四千円の奥歯で　◆南の島

ジンジャーを練り込む甘い生地を切るおおよそ四時の空より駆ける　◆水せ

減反の土の上にて四季面をくるくる変えて踊る老いたち　◆虫武一俊

三、四〇の食材が作りたてらしいホテルの朝食バイキングいただく　◆村田一広

お手ごろと笑われたっていいじゃない二人で決めた４℃なら　◆森内詩紋

４の字は「〜のために（for）」とも読めて温かい今日できたｆｏｒは三組くらい　◆杜野詩季

起きて、風

千原こはぎ

水面に文字を書くごと降り出した雨は頭を撫でてくれない
そちらから鍵を開けてよ赦されることのないまま脱ぎかけた靴
後悔の裏側にいて誰だろう夜になるたび切りつけてくる
今日からも明日からも数ヶ月後もたったひとりになれない甘さ
いつまでも孤独を嘆く明け方の重い瞼にアラームは降る
まだ雨が雪に変わってしまうから二月ことばをくれなくていい
思い出にちゃんとするため起きて、風　きみのにおいも手放してゆく
ふたりにはなれないひとりで春を待つ　誰ともつながることない小指

おなじ紅

中村成志

人はまだひとりじゃなくて暖冬も誰かのせいに出来るうれしさ
ささくれを深く毟られ玉と湧く血のよう　出し抜けに東の陽
雀らの群れ揺れさわぐ散りかけの梅の蜜ほど濃いものはなく
再起動頻繁にする端末のような四季かも常に風あり
心から笑うことなくわらうとき持ち去られゆく胸のひと掻き
歩き始めてだってだってと呟いておなかすいたへ辿り着くまで
おなじ紅ことなる叫び救急車の数台後をゆく消防車
深くふかく澄む紅が夜となり丸子紅茶を急須で淹れる

ベリーグッドイノセンス

なべとびすこ

解散のニュースはあの子にも届く揺れてるだろう生きてるなら必ず
君だけが「キミならすべて正しい」とぜんぶ見てきたように歌った
掴めるチャンスをわざと逃したんだよ変わった僕と向き合えなくて
最後まで愛し抜けたら悲しみと抱きあうチャンスはあったんだよな
最近はカレイの煮付けとか食って当時は響かなかった新譜
最高のバンドマンだよ相変わらず翻訳みたいな口調で話す
理想のキミに君はなってその腕で鳴らしてくれるロックンロール
死ぬまでそこで遊ぶんだろう白黒のギターをピストルみたいに持って

たつさきじゃないほうのぼくたち

西淳子

起立、礼、着席、起立、礼、ちゃくせき、きりつれいちゃくせき、きりつれー
三軍のアメトーークーです。ぼくたちはたつさきじゃないほうのヤマザキ
ていかんず。くみたててもくみたててもはこになれない、ならないほうの
それからはクララも廊下に立たされて、ていねんぴってけっきょくなあに？
僕に愛を　猫にビールを与えても犬にならない　僕にも愛を
月曜の朝の学年集会後、ささささきあらららってふらつく
立てるかい　ぼくが木下龍也なら君を背負ってあげられたのに
廊下にはレッサーパンダ、バケツにはシーモンキーのように懐メロ

テーマ詠「4」

三月は四日の花火いまもきみを傷つけ続けつづけてるんだ　◆西村曜
二人とも四人家族をあとにしてあらたに四人家族をつくる　◆袴田朱夏
次回作完結しても永遠に4号館で待っているから　◆畑　依裕
鉢植えの四葉のレッドクローバーわたしの窓辺でその手をひらく　◆薄荷。
保護犬を飼って4年も経ちたるが子どもを見ては今だ逃げ出す　◆ひなお
ようやっと長編小説三巻目あと一〇〇ページで四巻目となる　◆平本文
トンネルを抜ければ盆地がうがうと四方の山より猛暑降り来ぬ　◆廣珍堂
葬列は緑の谷町四丁目駅から続く小さな海へ　◆福山桃歌
カフェランチ4等分の幸せをひとり頬張るクアトロ・フォルマッジ　◆古井　朔
起きるには早いかもと思っても二度寝するには不安な時間　◆真岡まな

でも八首

袴田朱夏

でもわたしから外せないもう君が呼ばなくなった下の名前を
でも（だから）虐げられた人々の真上（真下）で生きていけます？
でもすき間だからとおもう仕事場に仰げば尊しひとりでうたう
でも祖父は父に農家を継がせずにいまのわたしに時をつなげた
でも神はわたしの今日にひろげゆくあかつきいろのマーマレードを
でもおれの墓に来たとき吹く風のひとつくらいはたぶんおれだよ
でも北緯38度線を越えられないヒトよ風の勝ちだよ
でも無事におれは育ってしまったよ防火扉の白うそくさい

ジュラ紀の声

薄荷。

夕方の風がこんなに強いからジュラ紀の声で泣きたくもなる
幼子は強くなれること疑わずビスコをビスコのままで頬張る
風と草以外は何もないけれど君の野原はいつも明るい
一心にあの子が踊る（筋肉にいのちの光をまとわせながら）
夕方の爬虫類館のワニの子の眠気がうつって大きなあくび
許されることであるなら校庭で飼い慣らしたいティラノサウルス
階段はほんの少しだけ錆びていて展望デッキにあふれる夕日
お互いにもたれかかっているときの重さははたして同じだろうか

自由律の歌　2

ひなお

一番人気とメディアの言っていた石破新総理支持率２８％の不思議
鋪道に枯れ葉が落ちている踏むとぱりぱりと煎餅のような音がした
蕁麻疹で２０年か先生と私は同じだがが受付の女の子が何代か変わる
兼好曰く気狂いの真似をしている者は気狂い飯山あかり正にそれなり
テレビではお門違いのゲスト等がどんな問にも自論？を語る
修司春樹は本歌取りモーツァルト松下電器も同じ　物創りの秘訣
山谷英雄と云う人の歌を読む上手いなと見れば佐太郎系の人なり
「強くなりたい人はお断り」なんだダイエット用ボクシングジムか

失敗だうけだ

廣珍堂

陽光は水面の下を見せぬまま無垢なる牙で氷山削る
マイクからお昼の校内放送の読み間違ひが千人へ飛ぶ
失敗もいいぢやないかといふひとがカレーうどんの飛沫を避くる
10ミリを適宜と書きし図面からミサイルが飛び味方を誤爆
休み時間にスキップで入る個室でもドアは薄くて誰かの水だ
本棚と同化しはじめグラビアは履歴を真つ赤な涙としたり
谷底で自我とふ石を蹴るならば山、川、空気、全て埋まりつ
泥水はヒエラルキーの底崩し扇状地なる羽根をつくりぬ

ほらふきがはじめる四月を待っているやり直すなら子どもに戻る　◆ 君村類

わたくしの好きな数字は4ですね縁起が悪いと嫌われるから　◆ 久保田毒虫

降る花が幽界みたいにつづいてて四半世紀はだまってしまう　◆ 小泉夜雨

抱きあつて四時間眠るもう朝に侵されはじめた夜の汽水で　◆ 西鎮

四葉のクローバーを探してあなたにあげたいの意味は訊かないで　◆ そう

ひとすじのマフラーなびかせ自転車を漕ぐ三寒四温の速度で　◆ たえなかすず

あなたとは四度目になるてりたまを今年も買ってひとまずは春　◆ 千原こはぎ

世界一遠く飛ぶ紙飛行機を試した答案サイズはＡ４　◆ とかげまろぅ

願わくは風を浴びたい駆けつづけ四肢粉塵のののち石原に　◆ 中村成志

404 not found　でも、あったことは忘れず書き続けたい　◆ 西淳子

綺麗じゃない月

福山桃歌

べっとりと色を塗りあうきみとぼく粘膜だけが真っ赤にお揃い
ひとりでは立てないきみに肩を貸しぼくも倒れていく　あっけなく
小説のあとがきだけを読んでもうわかったような顔をする癖
冗長な言葉づかいではぐらかす月は月でも綺麗じゃない月
たくさんの語彙だけがありこの夜を表す接続詞が見つからない
何層も重ねた夜の奥にある真意が欲しいと思っちゃうから
眩しさを知らないままで死んでいく羽虫だったらまだよかったのに
食い込んだ指の形の月だったしがみつかれたまるい輪郭

派遣さん

まさけ

わたくしの名前は静かにかき消され「派遣さん」と呼ばれています
クレームの対応させる人たちが食べてるめちゃくちゃ甘そうなチョコ
嘱託の人の誤植を直しよく効くジェネリックの頭痛薬飲む
新しい雇用契約書が来ない　三行半も無くて春風
弁当の固い梅干し噛み砕きゆるり登録してくタイミー
わたくしの後継ぐ人を急募する求人欄のいくつかの嘘
「非正規は」言う人たちが期待した中途の正社が二日で辞めた
明日から我が社ではない屋上で空に飛ばした自作マニュアル

犇

御糸さち

よく当たる占いなんてないという、世界の制作秘話　昼下がり
金の斧よりも電動ノコギリが良いけど水から出したのは駄目
地下鉄にパリヴァ（パーリーヴァンパイア）ひしめいている　渋谷へ向けて
数百年先　人類は顕微鏡のぞいてカントリーマアム見る
腹筋は崩壊しない　涙腺も崩壊しない　人体だもの
眠たくて笑ってしまうこの笑い声を夢まで持っていけたら
ひとりでも生きていけるよひとりでもジンギスカンで肉を焼けるよ
一回もリメイクされることのない人生でしたとてもあかるい

閃輝暗点

深影コトハ

夕風はやや死の匂い蜉蝣の羽の薄さで玉葱を剥く
詳細を伏せる二人の投稿を並べれば浮かびくる立体視
ぬるま湯で下着を洗う大切にしたら大切にされる気がして
ぐるぐるに振り回されて真っ白になって他人事みたいなシーツ
泣かざれば悲しくないと決められて私のお庭に小鳥を埋める
せ、い、よ、くと寝ながらフリックしてみればごらんよ十字を切る男たち
片時雨　調停調書謄本を三百円でコピーしにゆく
木漏れ日の斑点が腕に拡がって死ぬまでにやりたい百のこと

テーマ詠「4」

日々歩く四季の光の多彩さが凪ぐ感性を目覚ましていく　◆麻倉ゆえ

四捨五入すればわたしのさみしさも省かれてもうしづかな海辺　◆有村桔梗

きょうだいは「あちちのおさら」を理解したグラタン皿をふたつ買い足す　◆井倉りつ

四人から五人に増える空間が異常気象を妄想させる　◆石川順一

四艇のヨットを横に見送れば五艇目の顔してペリカンも　◆宇祖田都子

4つある次元のどこかに君がいる過去の写真を思い出にする　◆hs

幸せの4！とおどけて言ってみる「そう、ね。」と君が返す幸せ　◆歌島孟

曽祖母の呪文のように繰り返す三寒四温また春が来る　◆涸れ井戸

窓際に四月の雪が降り積もる嬉しいことが重なるように　◆河岸景都

しなやかな翼をひろげる四拍子　少女はしんと指揮台に立ち　◆北谷雪

レッツ！エンジョイ！詐欺メイク

水上歌眠

くらげってどこから見ても映え角度うらやましくて泣きたくなるね
ハイライト・ローライトの間にぽっかりと浮かぶ私を探してほしい
『捏造！』と堂々書いて売っている涙袋の捏造キット
目はでかい方がいいって思いこみ（思わされ）ほんとに得したのは誰
どの色か全然決まらんドラストで急に流れてくる阿修羅ちゃん
しあわせはパールの質感はみ出して過去も世界も塗ってしまえば
詐欺メイク　詐欺の予定はないけれど一番騙したいのは私
信頼がやがて依存になるようにメイクのやりすぎには気を付けて

耳に真珠（五十首詠より八首）

南の島

毎日を耳いっぱいに感じよう右鼓室形成手術が決まる
左向き眠れば音のない世界朝よわたしを忘れないでね
宇宙船みたいだ乗ったことはないけど、あ、眠い、最後の記憶
維持液とはすごい名前だこれ抜くと干からびて死ぬ感じするもん
幾重もの包帯ガーゼ取る瞬間音は飛び込み脳かき混ぜる
ふわふわになって倒れた肘の横耳から落ちる綿球ふわり
こんなときでさえ気になるギガバイト減るものばかり欲しがっている
さようなら真珠腫次は鼓膜ではなく耳たぶを飾ってほしい

箱詰の夢

水せ

手のひらにふれたはずの羽は消えて僕はひとりでゆめをみていた
絞め上げる喉からこぼれゆく蝶の行く先はだれも知らないまま
白い服つかめなかった指先は力なく落ち夜に溶けゆく
まちがいをえらべなかったこころからあけないでいてよるのはざまよ
まちがってないからきっとぼくたちのみちはいつかかさなっていくよ
雑踏のノイズのような機械音　相応しく在るみにくい体
ツリーから逃げ出した一番星の末路を夢に見る午前四時
終わらせてあげよう鳥籠の扉　開け放ったら春がくるから

山形線　北へ

六厩めれう

紙切符買うのが久しぶりすぎて投入口を探してしまう
乗り換えの客待ちをする過疎線は乗りたき者のすべてを救う
吹けば飛ぶ将棋の駒というけれど倒れはしても飛ぶことはない
信号を吹雪の中に探すためときどき立ち上がる運転士
着雪が枯れ木の先でまるくなり白梟の群れかとおもう
水よりも雪を落とせというように大きく口を開けている溝
雪国の仔とはいえども落雪の音に驚く犬は犬なり
白梟すっかり落ちて帰路にみる枯れ木は少し背を伸ばしたり

ジャスミンティー（茉莉花茶）

村田一広

化粧品溶かしたやうに鮮烈なジャスミンティーの薫りに酔へり
「煙いなあ。焼肉食べて来たのかい」「裏表焚き火で炙つただけです」
鍵盤を叩けば雨しぶきが散つて野外ライヴは最高潮に
南北に長い日本は「寒い」にも何十度もの温度差ありぬ
強いて云へば公園全体が家で訪ねればどこかに猫がゐる
体温を雪まで下げて溶かさないやうに雪まみれにて歩めり
長ねぎを買へばレジ袋飛び出してコントで見たのと同じ光景
雪国なら吹雪となるや我が町は雪の混ざらぬ空つ風吹く

はてしない５センチ

森内詩紋

白鳥が月の光を引いてくるだぁれもいない高松の池
シャッターの音とぼくらの呼吸だけ　薄氷はけして渡れはしない
足音が聞こえなくなり……ぼくは目を閉じずに此処に居れるだろうか
冬用のワイパーせわしなく動く対向車だって帰る　何処かに
あっという間に咲くスノードロップス狼狽えるたび春雷が鳴る
贈りたいから贈るのだ　それほどは高価ではないチョコを選んで
震度５がきたら安否確認を急ぐほどにはあなたが好きだ
はてしない５センチ闇に沈丁花香る頃にもきっと５センチ

揺れて（伍）

杜野詩季

十日経ち彼が実家にたどり着く　娘も驚く泣き顔見せて
お皿にはラップを敷いたどんなもの食べたか誰も記憶してない
コンビニもスーパーも人、人の渦　列を作った美しい列を
二組の布団に三人湿り気は温かくなる眠りの底で
今日やっと戻ったテレビＳＦのようなニュースとＣＭだらけ
町内会会長が来る今日の午後信じられぬが水が戻ると
十日ぶりお湯はりはせずシャワーだけ流した暗く重たい粒々
あの人が、この人たちが、と話そうとすれば声なき声だけ漏れる